

スリランカ国の牛肉生産情況調査

岡田 光 男

家畜生産科学科肉畜肥育学研究室

1. 目 的

スリランカ国における牛肉の生産の概況を理解する。

2. 期 間

1985年12月23日～1986年1月9日

3. 場 所

JOCV コロンボ事務所，協力隊員駐在機関，政府畜産局，VRI 及び政府直営牧場

4. 内 容

はじめに、スリランカ国の家畜飼養の概況及び飼養上の問題点、海外協力活動の概況を知るため JOCV コロンボ事務所を訪ねた。笹子駐在員の説明では、協力隊の在スリランカ隊員は現在 75 名、男性 40 名、女性 35 名、うち家畜飼育を職種とするものは 8 名で、その主体は養鶏と言うことであり、また、この国に対する協力事業はやっと 4 年目を迎えた程度であるため、現在のところ、家畜飼育に関し、どのように進めれば良いのかなどについての問題点の把握と詰めはまだ進んでいないと言うことであった。更に南部エラミニヤヤと北部のアトウンガマのトレーニングセンターを訪ね、その実態を見聞したところでは、配置先のポストとのコミュニケーションの不足や技術と言うものの相互関連の深さから、価値判断の異なる異国での協力活動の困難さを目撃した程度に止どまり、本来の調査目的である牛肉生産に関する情報は殆ど得られなかった。

次いで、ペラデニヤにある地方産業省に所属する畜産局とガンノルワにある VRI (獣医研究所) を訪ね、畜産局では局長代理より、畜産行政の概要を、VRI では所長代理より、畜産に関する試験研究の概要を伺い、更に、ヌワラエリヤにある政府営の牧場、キャンデー市営と畜場及び幹線道路沿いの 2～3 の養牛農家を訪ねスリランカ国の牛飼養の実態及び牛肉生産概況を見聞した。それらを総合して、スリランカ国の牛肉生産の概況を述べると以下のとおりである。

スリランカの牛飼養頭数は、1984 年現在約 170 万頭で、そのうち約 1/4 が乳用牛で、残りがシンハラ牛と称される在来牛である。乳用牛にはホルスタイン種、エヤーシャー種、ジャージー種及びレッドシンデー種などの純粋種とその雑種が含まれ、主として中央高地に分布している。一方、シンハラ牛と称される在来牛は全飼養頭数の 70% を占め、その 6 割はドライゾーンに分布している。

この牛はシンハリ民族が北インドより移住してきた際伴って来たものと言われ、それ以来雑多な交雑が行われて来たため、毛色や体形はまちまちで、原野や畦畔の草で、漫然と、副業的に飼養されている。一部、運搬などの役利用に当てられているものも見られるが、その大半は役利用から解放され、放牧中に自然繁殖され、ほ育中の母牛から自家用程度の乳を利用する程度で、その他は必要に応じて販売され、最終的には肉利用に当てられ、スリランカ国の主要な動物蛋白質の給源の役目を果たしている。もとより酪農から生産される雄子牛や廃用牛も同様に肉利用に当てられているが、毎年どの程度の牛が屠殺され、どの程度の牛肉が生産されているかについての統計資料は入手出来なかった。しかし、屠殺場に送り込まれる牛の大きさを見ると、体重にして100~200kgで、わが国の肉用牛の子牛並の大きさであり、枝肉歩留も50%未満と極めて少ないものであった。

この国の牛肉生産は上述のように廃物利用に近い生産方式であり、そのため、肉用牛の肥育と言う飼養は殆ど見られず、また、たとえ大衆肉としての牛肉であっても、積極的に牛を利用し、いかに効率的に牛肉を生産するかと言うことを考えるまでには至っていないようであった。この背景には、肉食を忌み嫌う根強い宗教があることは無視出来ないところである。従って、牛の育種改良も産乳量をも高めることにのみ力が注がれており、現在実施されているスイスとのプロジェクトにおいても、人工授精による家畜改良が計画され、ジャージー種やエヤーシャー種の精液による在来牛の貴化が進められている。

スリランカ国に限らず、発展途上国の畜産において問題になっていることは、家畜疾病に関する予防衛生のための技術や施策が確立されていないため、疾病の発生が多く、それによる生産阻害が大きいことである。そのため、飼養家畜をいかに疾病から守り、その健康を維持し、本来の生産能力を維持するかと言うことが畜産振興上大きな課題となっていることである。その証拠として畜産局と称した組織は正しくは Dept. of Animal Production and Health であり、また、畜産に関する研究機関の名称も Veterinary Research Institute (VRI) となっており、これらの機関が畜産に関する総ての業務や研究を分担し、畜産局では第一に家畜の改良と優良家畜の供給を業務とし、VRI では、家畜の疾病発生条件の予防と制御法の改善を第一の業務とし、家畜の改良、その選抜法と交配技術を第二の業務としている。

以上、スリランカ国の牛肉生産についての見聞を述べてみたが、今後この国における牛肉生産の効率化を考える場合、牛自体の健康保持が大前提であり、次いで牛自体の栄養改善、そして牛の生産改善が挙げられよう。ただし、その場合に於ても、単に栄養改善のための施策、例えば野草地の改良と言った単純な技術であっても、それに要する投資を上回る牛の生産反応があるかどうかを同時にチェックして行くことが必要であり、また逆に、生産性の高い牛の導入に当たっても、その牛の飼養管理技術を同時に検討して行くことが必要である。つまり特定の技術が定着出来るかどうかは、その技術導入に要する投資を上回る収益が期待されるかどうかにかかっているからである。

スリランカに於けるかかる見聞は、今後当該国からの留学生の指導に当り貴重な体験として役立つものと考えられ、このような機会を与えてくださった畜大後援会に、また大学当局に感謝する次第である。